美女肉売買組織
人肉レストラン
作者 大黒達也
本日のメニュー
美女の姿焼き
美女のモツ煮
美女肉ハンバーグ

# 『美女肉売買組織』

作者　大黒達也

## 一．あらすじ

片桐夫婦と従業員の恵理は、趣味で始めた会員制カニバリズム系サイトによって安定的な収入を得ていた。ある日、一本の電話によって、彼らの平穏な暮らしが根底から覆される。片桐夫婦は、人肉売買組織から逃れるために、兄の片桐譲とともに流浪の旅に出る。暗躍する人肉売買組織と、元陸上自衛官である片桐譲との壮絶な戦いが火蓋を切って落とされる。

二．登場人物

**片桐（かたぎり）　譲（じょう）**

陸上自衛官出身であり、殺しのエキスパート。残虐な性格の持ち主。敵であれば容赦なく殺害する。

**片桐（かたぎり）　諒（りょう）**

ホームページ制作会社を経営する傍ら、会員制のカニバリズム系サイトを運営する。兄の譲とは違って、弱気で温和な性格

**片桐（かたぎり）　忍（しのぶ）**

諒の妻。抜群のプロポーションと美貌の持ち主。人肉売買組織に付け狙われる。

**戸田（とだ）　恵理（えり）**

忍の友人であり、ともにカニバリズム系サイトのモデルを務める。極上の肢体を持った美女。

**加納（かのう）　圭吾（けいご）**

日本では名の売れたノンフィクション作家。中国で人肉売買組織の取材中に行方不明となる。その後、策略により、組織の長となり、世界的な人肉売買組織に君臨することとなる。

# 三・目　次

第一章　始まり
第二章　魔手
第三章　人肉オークション
第四章　逃走
第五章　超高級人肉レストラン
第六章　生贄

『本編』

## 第一章　始まり

ファインダーの向こうには、盛り上がった白い乳房を持った美女が、全裸で食卓テーブルの上に横たえられていた。女は清楚な容貌に切れ長の美しい二重瞼を持ち、色白で絹のように滑らかな肌の持ち主であった。身長は百六十五センチくらいで、手足が長く抜群のプロポーションを持っていた。年齢は二十代前半といったところだ。

女の周りにはトマトやレタス等の野菜が、上品に盛り付けられていた。唯一一席の椅子には、これまた若く美しい女が、豊満な肢体をタキシードに包み、ナイフとフォークを持ち、妖艶な笑みを

浮かべながら、今まさに目の前の女肉料理を食さんとしていた。

「最高だよ。忍！後少し太腿を開いてくれないか。恵理ちゃん。忍のオマ＊コにトマトを擦り付けてくれ」

三脚に固定されたデジタルカメラを操作していた三十代前半に見える男が女達に注文を付けた。

「これでいい？」

恵理と呼ばれたタキシードを着た女が、忍と呼ばれた裸女の膣に、ドレッシングが付いたミニトマトを擦り付けた。

「あああ……」

「感じているのか？忍」

忍は上を向いて清楚な顔を歪め、喘ぎ声を漏らした。

「忍ちゃん。超可愛い！」

恵理がミニトマトをひとつ忍の膣に押し込んだ。

「駄目……。恵理ちゃん。あああ……」

恵理はドレッシングと愛液に塗れたミニトマトを口に入れた。

「忍ちゃんのソースがついてて超美味よ！」

「いいぞ。恵理ちゃん。その調子だ。今度はオマンコにナイフを入れてみてくれ。優しくだぞ」

恵理が焦らすようにゆっくりと刃のついていないナイフを差し込んだ。

「あああ……。冷たい……。お願い恵理ちゃん。忍を食べないで……」

「もう駄目」

恵理はナイフを置いて、目の前に剃毛され、むき出しとなったサーモンピンクの膣に口を付けて激しい勢いで舐め始めた。指先を忍のアヌスに忍び込ませ、淫らに動かした。

「いいい……」

忍は、背筋を仰け反らせるようにして、鋭い喘ぎ声を上げた。

「しょうがないな。休憩とするか」

男が、ズボンとパンツを床に脱ぎ捨て、忍の寝ても崩れない盛り上がった乳房を鷲掴みにして、可愛い口に黒々とした男根を差し込んだ。忍は潤んだ瞳で、片桐を上目使いに見ながら、音を立てて、美味しそうに男根をしゃぶり始めた。ジュパ

ジュパという嫌らしい音がスタジオ内に響いていた。

そこは、札幌市郊外にある個人住宅の地下に造られたスタジオルームであった。三十畳ほどの空間には、撮影用の食卓テーブルが配置され、そこでは家主である片桐諒とその妻、忍と、忍の友人である戸田恵理が、全裸となり互いを貪り合っていた。

部屋の片隅には、人一人が入れるくらいの巨大なガラス製の鍋が、巨大なコンロに載せられてい

た。壁の一面は棚となっており、デジタルカメラやデジタルビデオが整然と並べられていた。

また、壁の一面はガラス張りとなっており、その向こう側は裏庭に造られた換気と採光用の空掘りへと続いていた。そこからは、日差しが、燦燦と降注いでいた。厳冬期であっても快晴であれば、空掘りに降り積もった積雪に陽光が反射して眩しいくらいであった。

さて、家主の片桐諒についてであるが、彼は、民間の中小企業からホームページ制作を請け負う有限会社を経営していた。会社といっても妻の忍と友人の恵理が社員のすべてであり、本業の方の売上はたいしたことは無かった。片桐は、本業の

腕を生かして、会員制のアダルトサイトを運営していた。こちらの方が遥かに羽振りは良かった。

カニバリズム系のサイトで、主に忍や恵理をモデルとして、会員にエロティックな画像やビデオを提供していた。モデルは一般からも、インターネットの掲示板を使って公募を行っていた。

会費は月千円で、３千人くらいの会員を集めていた。

ホームページの呼び物は、いわゆる人肉オークションであった。実際に人肉を売り買いするわけではなく、あくまでバーチャルなものであった。

全裸にした忍や恵理を食卓テーブルに載せ、乳房や尻や太腿をパーツごとにアップで撮影し、そ

れをホームページに公開し、オークションにかけた。

もちろん、お遊びと言うことを会員達も百も承知であり、適当な値段を付けて競り落とした。

代金支払い後に送られるのは、女達が身に付けたパンティやブラジャーであった。当然のことながら誰も文句を言うものはいなかった。その日が来るまでは……。

ある日の午後、地下のスタジオルームでは、片桐夫婦と社員の恵理が、ビデオ制作を行っていた。部屋の中央には、水をはられた巨大なガラス製の鍋が配置され、全裸となった忍が中に入れられていた。

コンロに載せられた鍋の底には、ホースがセットされ、外部から空気を送られる仕組みとなっていた。それで、沸騰しているように見せかけるのだ。

傍らには、極上の裸身にエプロンを纏っただけの恵理が立ち、巨大なシャモジを持って鍋の中を覗きこむようにしていた。鍋の中には、忍の他にタマネギやニンジン等の野菜が入れられていた。

これは年に数回、某ホテルで開催する会員パーティの呼び物でもあった。　その際は、全裸にした忍や恵理や一般公募の女達を用意した巨大な鍋に、四十五度くらいのお湯や、予め熱を通した豚肉や野菜と一緒に入れ、人肉スープを作り会員達

に振舞った。人肉スープは、女達を引き上げてから、本格的に加熱した。会員達は、鍋から上げられテーブルの上に横たえられた女達を鑑賞しながら、熱々のスープに舌鼓を打った

「いいよ。恵理ちゃん。今度はスープをシャモジで掻き回してくれないか。忍はもっと苦しそうな表情を浮かべるんだ」

片桐は女達に指示をしながら、鍋から伸びていた電気コードの先に付けられた機器のスイッチを押した。

「あああ…。駄目……」

忍が美しい顔を歪ませ、鋭い喘ぎ声を上げた。コードの先は、忍の膣とアヌスに忍び込ませたピン

クロータへと繋がっていた。

「いいぞ。忍。お前は、茹で上げられ食べられるんだ」

片桐がデジタルカメラのフェンダーを覗き込みながら、上擦った声で言った。　と、その時、片桐のポケットから携帯の着信音が聞こえてきた。

「こんな時に、タイミング悪いな。少し休憩しよう」

女達に告げてから、部屋の片隅に置いてあるソファに座り、携帯電話に耳を付けた。

「もしもし……」

「お忙しいところ、済みません。会員の加納と申します」

「会員？何ですかそれ？」

「ですから、貴方が運営しているカニバリズムサイトの……」

片桐はどこで電話番号が漏れたか不審に思っていた。当然、会員には知らせていなかった。

「何の御用ですか？」

「本日、貴方の口座に四千万振り込みました。当然、オークションで競り落としたのは私です。忍さんと恵理さんを渡していただきたい」

「ふざけるな！冗談はたいがいにしてくれないか！」

「冗談？私は本気ですよ。あの二人なら最高の食肉が取れるでしょう……」

最後まで聞かなかった。携帯を切り、ソファテーブルの上に置いてあったノートパソコンを開いた。悪戯だと思いながらも、言い知れぬ不安を抱いていた。取引銀行のサイトにアクセスし、ユーザアカウントとパスワードを入力した。

「うっ……」

片桐は思わず呻き声を上げた。紛れも無く四千万円は振り込まれていた。全裸姿にタオルを巻いただけの忍と恵理が、心配そうに片桐の顔を覗き込んでいた。

翌朝、恵理はいつまで待っても出社しなかった。忍が携帯に電話を入れたが、繋がら無かった。心配した二人は、中央区にある恵理のマンション

を訪れたが留守であった。その日の午後、郵便受けに一通の封書が入れられた。

片桐が中身を確認すると、それは恵理の人肉受領書であった。愕然とした面持ちで二人は長い間、見詰め合っていた。

## 第二章　魔手

「もしもし。兄貴か？」

「どうした？　声が上擦っているぞ」

「ちょっとやばいことになっているんだ。今、どこにいる？」

「近くさ。定山渓のホテルで女と温泉三昧だよ。それも厭きてきたがな」

電話の向こうから、女の押し殺したような喘ぎ声が聞こえていた。それもどうやらひとりではなさそうだ。

「……助けてくれないか」

「可愛い弟を見捨てると思うか。ところで金はあるのか？ホテルの支払いがきつくなってきたん

だ」

「金ならいくらでも払うよ。命を狙われているんだ。今も監視されているみたいだ」

「わかった。一時間でそっちに行く。それと預けてあったバックに薬ビンが入っているが、一粒忍ちゃんに飲ませておけ」

「何故？」

「ちょっとの間、眠っていてもらうだけさ」

電話はそれで切れた。ジャスト一時間後、玄関のチャイムが鳴った。モニターに兄の片桐（かたぎりじょう）譲が映っていた。諒が鍵を開けると、分厚い胸板を持ち身長百八十センチを軽く超える譲（じょう）が、大きな皮袋

を二つ肩に担いでいた。

「何だ？それは」

「話は後だ。入るぞ」

譲が諒を押しのけるように、大股で居間へと向かった。カーテンが閉められていることを確認して、皮袋の口を開けた。

「監視役だ。凄い美女だぞ」

袋には猿轡を嵌められた美しい若い女と、ぐったりとしてピクリとも動かない女が入っていた。

二人とも黒皮のロングコートを着ていた。

「こっちの女は息をしていない」

「ああ。首を圧し折ったからな」

「何で殺したんだ！」

「俺に銃口をむけたからさ」

譲は平然とした表情のまま、ベルトに差していたベレッタ九二Fと、シグサワーP二二〇の自動拳銃をソファテーブルに置いた。

「こいつらはプロだ。こんなチャカは中々手に入らない。お前達相当やばい連中に狙われているんだな。そうだ忍ちゃんは何処だ？」

譲は他人事のように言った。

「二階で寝ているよ。……兄貴には俺が趣味で始めたサイトのことを話していたよな」

「ああ。女を食いまくる悪趣味なやつだろう」

「悪趣味は余計だよ。サイトでやっていた人肉オークションで、忍と恵理ちゃんが大金で買われた

んだ」

「いくらで？」

「二人で四千万だ」

「馬鹿な！人間一人が二千万円だって！半分の一千万だって買い手は見つからないさ」

譲が唸るように言った。

「金は、昨日銀行に振り込まれた。恵理ちゃんとも連絡が取れない。恵理ちゃんや忍をどうするつもりなんだろう」

「……四千万か。そいつは大金だな。売春目的で二千万とは高すぎる。人身売買という線かな。中東諸国の金持ちに売りつけるとかな」

「俺達を守ってくれたら全部あげるよ」

「そうだな。準備金は必要になる」

「引き受けてくれるのか！」

「あたりまえだろう。取りあえずは、ここからは離れた方がいい。一時間で必要な荷物をまとめろ。それと空いている部屋とバスルームを使わせてくれ」

譲が床に横たえていた捕虜の女を肩に担ぎ上げた。

「どうするんだ？」

「決まっているだろうが」

譲はそれ以上、言おうとせずウィンクをしてバスルームの方に消えた。

二階にある客間では、中央に置かれたダブルベッドに捕虜の女が全裸で横たえられていた。シャ

ワーを浴びせたのか、黒髪が濡れていた。傍らには、譲が全裸姿になって、女を見下ろしていた。女の裸身は白く滑らかで、シミがひとつも見当たらなかった。今流行りの女優に引けを取らぬ美貌の持ち主でもあった。譲は無造作な感じで女のアヌスに人差し指を差し込んだ。女が低い呻き声を上げて、背筋を仰け反らせた。最高の締り具合であった。空いている方の人差し指を悌毛して剥き出しとなった膣に差し込んだ。

「うっ……」

女が猿轡の下から、低い呻き声を漏らした。捕虜の女に対し、憐憫の情など一欠けらも無かった。犯すだけ犯し抜いて、尋問した後に、口封じのた

めに処分するつもりであった。

盛り上がった白い乳房に口を付け、乳房を舐め回しながら、腰を前後に突き動かした。膣が男根を痛いくらいに締め上げていた。アヌスにも指先を入れて掻き回した。指先に絡むような粘膜の感触がたまらなかった。

女は呆然とした表情で天井を見上げていた。可能なら猿轡を外して、舌を吸出し存分にしゃぶりたかったが、舌を噛み切られるのが落ちなので、それは我慢した。

五分ほどで一回目の欲望を膣に吐き出した。女はよほど悔しいのか、目に涙を溜め、嗚咽を漏らしていた。

譲は女の股間に座り、精液と愛液で濡れた膣に人差し指と中指を入れ、膣内を擦り上げるように激しく動かした。

「これから聞くことに、はいかいいえで答えろ。はいは、首を上下に、いいえは横に振るんだ」

指先を動かしながら、尋問を始めた。

「お前達の他に監視役は何人いる？五人か？十人か？」

女は答えようとせず、鋭い目付きで譲の顔を睨み付けた。譲はいっそう激しく指先を動かした。やがて女の視線がぼやけ始めた。快感と戦っているのか、しきりに、猿轡の下から低い喘ぎ声を漏

らし始めた。

「アジトは何処にある？」

譲は女が口を割ることなど、最初から期待していなかった。今はただ、嬲り抜くことが目的だった。敵の男に犯され、快感に悶えることがいかに屈辱であるか思い知らせてやるつもりであった。膣内を擦りながら、アヌスに空いている方の指先を捻じ込んだ。女の全身がビクンと波打った。尿道口から透明な液体が噴出した。

「潮吹きやがって。そんなによかったのか？この淫売め」

女を裏返しにして、泣きたくなるような美しい尻を舐め回した。尻を両手で割って、きれいなア

ヌスを目で存分に犯し抜いた。顔を押し込んで舌先をアヌスに捻じ込んだ。女の喘ぎ声が高くなった。どうやら精神のタガが外れたらしい。

アヌスを十分に湿らせてから、一気に硬くなった男根を突き込んだ。女が鋭い喘ぎ声を上げ、全身を仰け反らせた。膣やクリトリスを指先で刺激しながら、激しい勢いで腰を前後に動かした。凄まじいまでの締め付けであった。数分で二回目の欲望を吐きだした。

丁度一時間後、譲が全裸姿の女を引き摺るようにして居間に現れた。女は朦朧とした表情で、よたよたと歩いていた。諒が居間で荷造りをしていた。

「最高だったぜ。お前も真由美を抱いてみるか？」

「真由美というのか？その女の名は？」

「いや、俺が勝手につけた名だ。こいつは一言もしゃべらなかった。名無しじゃ都合悪いだろう。準備はいいのか？」

「ああ。後は車に積みこむだけだ」

諒は、びっしりと詰まったボストンバックを持ち上げながら言った。

譲は再び、真由美を皮袋に押し込んだ。諒が車庫に入っているランクルに荷物を入れた。それから、二階に上がり、眠り続ける忍を両腕に抱いて降りてきた。忍は、Ｔシャツにミニスカートを穿いていた。ミニスカートから伸びた形のいい長い

足が艶かしかった。諒が忍に黒皮のロングコートを羽織らせ、車庫へと向かった。

「相変わらず色っぽいな。お前のカミさんは」

譲が、諒の後姿に声をかけた。

「兄さん。変な気を起こさないでくれよ」

諒は、女好きの兄が、心配でならなかった。忍はどんな男でも虜にする美貌と肉体を持っていた。兄が本気になったら、自分では阻止できないと恐れていた。

「俺は、こいつらの車で行く。後に付いて来い」

譲も二人の女達を入れた皮袋を担ぎ上げ家を出た。数分後、諒と忍が乗るランクルと譲が運転するＢＭＷが、深夜の住宅街を走り出した。

譲は助手席を倒し、真由美を入れた皮袋を載せていた。皮袋から裸の下半身が出ていた。譲は膣やアヌスを指先で嬲りながら、片手で運転を続けた。

譲が運転する車は、寒風が吹きすさぶ雪原の真只中に停まった。目の前に廃品回収業者の薄汚れた立て看板が見えた。そこから先には、有刺鉄線と木杭でできた塀に囲まれた周囲四百メートルほどの空間が広がっていた。中には廃車となった様々な車種の車が堆く積まれていた。忍と諒は、市内のホテルに残して来た。

譲(じょう)はＢＭＷを降りて、鉄製の門扉の前に立ち、インターホンのボタンを押した。

「譲じゃないか！久しぶりだね。最近羽振りはいい……」

「悪いが、挨拶はそのぐらいにしてくれないか。凍えそうなんだ」

譲がインターホンから聞こえてくる女の声を遮った。

「悪かった。今開けるよ」

目の前の門扉がガラガラという音を立てて、開けられた。譲はＢＭＷに戻り、敷地内へと進入していった。

建坪百坪はありそうなログハウスの一階に、三

十畳ほどの居間が造られていた。レンガで造られた重厚な暖炉には、真っ赤に燃え上がる薪がパチパチと音をたてていた。中央に配置された樫の木製で重厚な食卓テーブルには、黒縁メガネをかけた小太りの中年女と、譲が向かい合って座っていた。

「何が望みだい？」

「銃器と弾薬。それに始末して欲しい女が二人だ。車も置いていきたい」

譲は傍らの床に置いておいた二つの皮袋のうち、一つ目の口を開けた。中から、全裸姿の女の遺体が出てきた。

「何だ。仏さんじゃないか。いい女なのにさ。生

きてりゃ。ただで引き取ってやったのに」

「慌てるな」

譲は口元に笑みを浮かべながら、もうひとつの口を開けた。中から全裸に剥かれ、後ろ手を手錠で拘束され、猿轡を嵌められた真由美が出てきた。譲が猿轡を外した。真由美が譲の顔を睨み付けた。口を開くことは無かった。

「上玉じゃないか！あんたが最高の美男子に見えてきたよ」

中年女が、満面の笑みを浮かべた。

「デザートイーグルとレイニングブル四五四とインングラムはあるか？それに手榴弾も欲しい」

「手榴弾だって。戦争でも始める気かい？」

中年女は、床に横たえられた真由美の裸身を食い入るように見詰めながら、上の空といった感じで答えた。

「そんなところだ」

「いいよ。全部まとめて、三百万だ。銃弾はサービスしとくよ」

譲は懐から分厚い紙袋を取り出して、テーブルの上に放り投げた。

「商談成立だな。偶然だが、三百万入っている」

「そうだね。品物は後で用意するよ。その前に女を見せておくれ」

譲は床に横たえられた真由美を軽々と抱き上げ、中年女の目の前に置いた。

「あたいはね。男には興味が無いんだ。若くキレイな女のオマンコが好物なのさ」

中年女は上擦った声で言いながら、真由美の太腿を押し開いた。

「きれいな色だね。惚れ惚れするよ。匂いもいいね。シャワーでも浴びてきたのかい？味見させてもらうよ」

中年女が、真由美の股間に顔を押し込んだ。すぐにピチャピチャという厭らしい音が聞こえてきた。

「悪いが、あんまり時間が無いんだ」

「いいじゃないか。あんただって女達がちゃんと処分されるか見届けたいだろう？」

中年女が、愛液に濡れた顔を上げた。

「まあな」

「決まりだね。美味しい料理も食べさせてあげるよ。先に死体を処分しないとね」

中年女は、テーブルから女を引き摺り下ろすようにして、床に立たせた。真由美は、身長が百七十センチくらいあり、百五十センチそこそこの中年女と並ぶと、滑稽な感じがした。

「大人しくしてないと、ブチ殺すよ」

中年女は、真由美の重たげな乳房を鷲掴みにしながら、空いている方の手で懐から取り出した黒光りするリボルバーの銃身を、真由美のアヌスに差し込んだ。真由美の盛り上がった白い尻が無残

に震え出した。中年女は、後ろ手を拘束された真由美の黒髪を引きながら、隣室へと消え、すぐに戻って来た。

「あの女は、鎖に縛り付けてきたから大丈夫だよ。死体を持って付いてきな」

譲は死体が入った皮袋を背負い、中年女の後に続いた。

譲と中年女の二人は、ログハウスの地下に造られた巨大なプールの近くに立っていた。プールといっても水は濁り、底は見えなかった。腐敗臭がして息苦しいほどであった。

「ジョン。飯の時間だよ。出ておいで」

中年女が、呼びかけると、目の前の水面が盛り上がり、巨大な黒い物体が浮き上がってきた。ワニだ。それも八メートル近くもあり、クロコダイル科に属するナイルワニであった。人食いワニとして恐れられている凶暴な種類だ。

「どうしたんだい？ジョン。いつもは浮き袋みたいに浮いているのに。このお兄さんが怖かったのかい？譲、ぼさっとしていないで、餌をやってちようだいな」

譲は無言で、皮袋から取り出した死体を水面に放り投げた。間髪を入れずナイルワニが巨大な口で死体を挟み込んだ。死体とはいえ、美しい尻や乳房ごと食われる様は刺激的であった。

「今日は食欲旺盛だね。同じ死体でも若い女が好

きなんだろう」

中年女は目を細めて、ナイルワニの食事を眺めていた。譲と中年女は、クロコダイルが餌の女を食べ尽くすのを確認してから、居間に戻った。

「これでも飲んでいてくれ。テレビやビデオも自由に使っていいよ。これから下拵えをするから」

中年女は、譲にジンのボトルとグラスを手渡した。

「氷は無いのか？」

「冷蔵庫に入っているから、適当に使っていいよ」

中年女は居間と繋がっているダイニングキッチンを指差してから、捕虜の女を監禁している隣室へと消えた。

暫くして、真由美のものと思われる低い喘ぎ声が聞こえてきた。譲は、食卓テーブルの椅子に腰掛け、ジンを飲み始めた。

「最高だね。若い女のオマ＊コは」

中年女はベッドに横たえられた真由美の股間を覗き込んでいた。真由美は後ろ手を手錠で拘束されているので、為すがままであった。空ろな視線を天井に向けていた。

中年女はサーモンピンクの膣やクリトリスをしゃぶりながら、盛り上がった白い乳房を鷲掴みにして揉みしだいた。手に吸い付くような滑らかな肌を持っていた。今度はうつ伏せにひっくり返し、

盛り上がった白い尻を鷲掴みにした。

「お尻もギッシリと肉が詰まっていて、美味しそうだね」

満面の笑みを浮かべながら、頬擦りした。それから尻を両手で割って、割れ目を覗き込んだ。サーモンピンクのきれいなアヌスが息づいていた。舐めてみた。部屋に付いているシャワーで丹念に洗ったので異臭はしなかった。

「肌も滑らかだよ。吸い付くようだ」

真由美の太腿に手を滑らせながら、上擦った声で独り言を言った。それから時間をかけて真由美の全身に舌や手で愛撫を加えた。それまで一言も発しなかった真由美が、低い喘ぎ声を漏らし始め

た。耐えられるものでは無かった。中年女は、女の弱点を知り尽くしていた。何時の間にか真由美は忘我の域を漂っていた。

中年女は、真由美にうつ伏せの姿勢を取らせ、着ていた衣服をすべて脱いだ。脂肪でだぶついた醜い裸身に極太のペニスバンドを着けていた。

泣きたくなるような美しい尻を抱いて、膣に押し込んだ。真由美が背筋を仰け反らせ鋭い喘ぎ声を上げた。真由美の盛り上がった白い尻に、何度も何度も股間を打ち付けた。

譲はジンを飲みながら、何時の間にか寝入っていた。時折、女の鋭い喘ぎ声や啜り泣きの声で目

が覚めた。完全に目覚めることは無かった。暫くして、中年女が全裸姿の真由美を厨房に引き摺るようにして連れて行くのが見えた。意識はそれで途切れた。

中年女は、バスルームに真由美を連れ込み、バスタブに上半身を落し込んだ。目の前に据えられた美尻を割って、アヌスを剥き出しにさせ、舌で

舐った。十分に湿らせてから、ホースを差込、温水を注ぎ入れた。

数分後、限界に達した真由美のアヌスから、水流が噴出し、間髪を入れずに汚物がひじり出された。

「こんなにいい女でもウンチは臭いね」

側で食い入るように見詰めていた中年女が、楽しそうに笑った。水浣腸と排泄は、排泄物が透明になるまで続けられた。

真由美に浣腸を施した後、ボディソープとシャワーで洗い清め、キッチンに連れ込んだ。長さ二メートルはある特大の俎板に真由美を座らせた。

真由美は中年女による激しい陵辱のために意識

が朦朧としていた。真由美の腕に注射器で薬物を注入した。

「すぐに眠くなるよ。いい娘にしていたから楽に死なせてあげるね」

数秒後真由美は、意識を失い、俎板の上に横たわった。中年女が、刺身包丁を手にして真由美に近付いた。

譲は胃腸を刺激するような香ばしい匂いで目を覚ました。目の前に置かれたジンのボトルは空になっていた。隣に新しいボトルが置かれていた。周りには、様々な器に肉料理が盛られていた。

「あんた。チャカを握りながら眠っていたよ。本

当におっかない男だね」

中年女は、譲のズボンからはみ出したベレッタの銃握を見詰めながら言った。

「癖なんだ。気にしないでくれ」

「さあ。京子姉さん自慢の手料理だよ。遠慮しないで食べてくれ。そうそうメインディッシュは今調理中だから、もう少し待っておくれ」

中年女が始めて自分の名を口にした。

「こいつは何だ？」

一番近くの料理を指差した。

「生肉をタルタルステーキのように叩いて、レモンとオリーブオイルと塩コショウで和えてみたんだ。ホッペが落ちそうになるくらい美味しいよ」

譲は肉片を箸で摘んで口に放り込んだ。途端にこれまで経験したことの無い味が口内に広がった。きらいな味では無かった。いや、かなり美味と言えた。

ジンを飲みながら、貪るように食べた。

「そっちはね、腿肉を細切りにして、色々な薬味や調味料で和えたものでね、ユッケのようなものだよ」

京子は説明した後で、肉料理に舌鼓をうった。目を細め、満足そうな笑みを浮かべた。

「何だい。これ全然臭みがないね」

京子は自分で調理しておきながら、驚いたように、箸で摘みあげた肉片を見詰めた。

「たぶん。果物や野菜を主食としていたんだね」

意味不明な独り言を呟いた。

「ああ。美味いよ。ところで何の肉だ？」

譲が肉料理をつまみながら尋ねた。

「これはね。醤油、ゴマ油、刻みねぎ、おろしにんにくで和えたレバ刺しだよ。食べてごらん。やっぱり新鮮な生肉は最高だね」

京子はそれには答えず、他の料理について説明した。譲は勧められるままに箸を動かした。

「そろそろ、メインディッシュが仕上がったようだね」

京子は席を立ち、キッチンに消えた。すぐに、キャスターを押して戻って来た。何と、キャスタ

ーの上には、こんがりとキツネ色に焼き上げられた人間の尻が載せられていた。その隣の皿には、真由美の生首が立てられていた。死化粧を施された顔は、まるで生きているように見えた。また、その隣には深底鍋が置かれていた。透明なスープの中に、タマネギやニンジンと、手足の断片が見え隠れしていた。

「これが肉の正体さ。驚いただろう？」

京子が譲の顔を覗き込むようにして言った。

「こうやって、死体を処分するのか？」

聞きながら、レバ刺しを一切れ口に放り込んだ。

「驚いたね。あんた平気なのかい？」

「人肉は初めてだ。これほどの美味とは思わなか

った」

のんびりとした口調で答えた。

「以前、愛人を処分して欲しいという奴がいてね。同じように料理をふるまったことがあるのさ。そいつは、最初、愛人の肉とは知らないで、貪るように食べていたんだが、正体を教えたら、ゲロゲロと吐きやがってね」

「そいつはどうなった？」

「ドタマ撃ち抜いてジョンの餌にしてやったよ。アタイの料理にゲロを吐いたんだからね」

「俺にもそうしたのか？」

「とんでもない！いくらアタイでもあんたには手を出さないよ」

京子は、真由美の尻肉を一切れ肉切り包丁で切り取り、皿に載せ譲の前に置いた。譲は肉汁がしたたるロースト肉をフォークは使わず、手掴みで口に入れた。感触を確かめたかった。口内で、すぐに肉汁が弾けた。絶妙の塩加減であった。肉質も柔らかく蕩けるようだ。食べながら、真由美の白い裸身を思い出していた。自分が犯し抜いた美しい肉体は、料理され自分の一部になろうとしていた。

「尻肉のローストは気に入ったかい？スープも飲みなよ」

譲は勧められるままに、スープを飲んだ。

「フルコースの仕上げだよ。脳味噌に卵の黄身と

糖蜜とレモン汁を混ぜて、フリーズさせてみたんだ」

京子は、真由美の顔を押さえ、毛髪を引っ張った。頭部が二つに割れ、調理された脳味噌が露になった。それを皿に取り、譲の前に置いた。

「若い女は本当に最高だね。身体で満足させてくれて、舌でも楽しませてくれるんだから」

# 第三章　人肉オークション へと続く